

## [書評] 吳介民・范雲・顧爾德編 『秩序續紛的年代 -- 走向下一輪民主盛世』

|     |  |
|-----|--|
| 著者  | 佐藤 幸人  |
| 権利  | Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア<br>経済研究所 / Institute of Developing<br>Economies, Japan External Trade Organization<br>(IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a> |
| 雑誌名 | アジア経済  |
| 巻   | 53   |
| 号   | 2  |
| ページ | 46-49  |
| 発行年 | 2012-02  |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所   |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/2344/1175">http://hdl.handle.net/2344/1175</a>  |

呉介民・范雲・顧爾徳編

## 『秩序繽紛的年代』

——走向下一輪民主盛世——』

新店 左岸文化 2010年 398ページ

さとう ゆきひと  
佐藤 幸人

## はじめに

1990年3月の台北、わたしは多くの学生とともに、中正紀念堂の広場に座っていた。1980年代後半に確かな歩みを始めた台湾の民主化運動は、このとき、ひとつの頂点を迎えていた。国民大会代表<sup>(注1)</sup>の一部が中国国民党（以下、国民党）政権内の内紛に便乗して自らの権益を増大しようとしたことは、多くの学生や民衆の強い怒りと反発を惹起することになった。学生たちはほどなく総統府から数百メートルしか離れていない中正紀念堂に座り込んだ。当時、国立台湾大学の修士課程に留学し、学生寮に住んでいたわたしは、歩いて10分もかからない中正紀念堂に毎日のように通い、台湾大学の学生証を見せて学生たちの輪の中に入っていた。本書の編者のひとり、范雲は学生たちのリーダーとして度々壇上に立ち、演説をしていた。他の執筆者たちの多くもあの輪の中にいたことが、本書の記述で示されている。

その後、台湾の民主化は着実に進行し、2012年1月には5回目の総統直接選挙が行われる。中正紀念堂に参集した学生たちの世代は、今では社会の中堅となっている。彼らは運動の象徴であった百合を冠して、「野百合世代」と呼ばれる。本書のタイトルを和訳すれば『秩序繽紛の時代——次なる民主主義の繁栄に向かって——』となる。野百合世代のなかから研究者や社会運動家の途を歩んだ者たちが、その後の20年間の台湾社会を顧み、現在の到達点を見つめようとした試みである。とはいえ、副題にあるように、また編者たちが序説で強調しているように、単なる回顧に浸っているわけではない。台湾社会の

将来に向けた礎として、これまでの20年を振り返ろうとしているのである。

この書評はかつて野百合世代の熱情と緊張に遭遇し、その後隣人として観察を続けた者による、彼らとの対話の試みである。以下でははじめに本書の構成と特徴を示し、続いて2つの点を論じてみたい。第1に、本書の各章を読み合わせることで、市民社会およびその国家と市場との関係に関するインプリケーションを引き出す。第2に、本書のトピックの広がりを検討し、そこから台湾社会の全体像に関する示唆を導き出すとともに批判を行う。

## I 本書の構成と特徴

本書は3人の編者と黄秀如による序説のほか、20の論考によって構成されている。扱っているトピックを列挙すると、記録映画、文化政策、芸術、知識人、環境保護運動、コミュニティ建設、労働運動、女性運動、「新移民」<sup>(注2)</sup>、教育改革、憲政改革、司法改革、ポピュリズム、農村、金融資本、医療保険、エスニックグループ、メディア、中国と非常に広範である（後述するように、教育改革については2本の論考がある）。一見すると脈絡なくピックアップしているようだが、各章を読むとそれぞれが1990年以降の台湾社会のダイナミズムの重要な構成要素であり、相互に関連していることも少なくないことがわかる。

本書は学術的に重要なインプリケーションを含んでいる論考も収めているが、それは本書の主たる目的ではない。本書が目指したものは研究と現実の社会の対話、あるいは社会運動の実践に携わってきた者たちの自省である。それゆえ、本書の執筆者には研究者ばかりでなく、社会運動家も含まれている。また、社会運動に携わってきた研究者も多い。たとえば「新移民運動——着実に進む方が早い——」（新移民運動：慢一點，比較快）を執筆した夏曉鵬は社会学者であるとともに、台湾人男性と結婚した東南アジア出身の女性の支援を最も早い時期から行ってきた。

論考のスタイルもまたさまざまである。客観的な視点から分析している論考もあれば、自らの経験を中心に論じている論考もある。たとえば林継文の「憲政改革は何故休止したか」（憲改為何休市？）は前

者のタイプである。台湾の民主化の主軸は憲法の度重なる修正であった。1991年から2005年の間に7回の修正が行われた（ただし、うち1回は司法によって無効とされた）。しかし、2005年の修正を最後に停止している。林の論考は停止の理由を政党間のゲームの帰結として説明している。一方、典型的な後者のタイプの論考は、呉音寧「農村から都市へ、そして再び農村に戻るのか」（徒農村到都市、再到農村？）である。はじめの2つの節では統計資料とともに詩を使って衰退する農村の状況を描出し、最後の節では自らがどのように「農村再生条例」反対運動に取り組んだかを述べている。

本書の興味深い特徴のひとつは、各章の扉に執筆者の自己紹介が提示されていることである。あっさりとして現在のポジションと研究テーマのみを示した章もあるが、論じているトピックと関わるこれまでの経歴や、簡単ではあるがトピックに対する心情まで開陳している章もある。たとえば「コミュニティの名で」（以社區之名）を執筆した楊弘任は、1989年の「殻のない蝸牛」運動<sup>(注3)</sup>における忠孝東路での野宿が最も印象的だった情景であることや、1990年3月の学生運動を機に法律から社会人類学に専攻を変えたことを述べている。このような自己紹介から、本論が客観的な論述となっている論考でも、それが執筆者の体験に裏打ちされていることがわかるのである。

本書の最後には1970年代以降の関連する事項の年表が付されている。この年表から、各章で扱われたトピックが時系列的にどのような前後関係をもっていたのかを理解することができる。

## II 市民社会と国家および市場

本書の第1の意義は、社会運動あるいは社会運動の活動の場である市民社会と国家、市場との関係について、台湾的な特徴を読み取れることである。本書では、台湾の社会運動と国家および市場との関係にしばしば論及している。しかも、その多くは対抗的な関係である。もちろん、社会運動や市民社会と国家、市場の間に対抗的な関係があることは一般的であり、台湾に限らない。しかし、本書の論考から台湾においては3者の間にどのような関係があるのか、またどのように関係が構築され、変化してき

たのかがみえてくる。

台湾の社会運動の多くは権威主義体制期にスタートし、もともとは主として国家と対峙していた。潘翰声「国家と資本の挟撃の中成長する環境保護運動」（在國家與資本夾擊中成長的環保運動）によれば、環境保護は民主進歩党（以下、民進党）政権期に部分的な前進があったものの、環境保護運動と国家の対抗関係は民主化後も継続している。

他方、民主化によって国家の性格が変質するなか、国家との関係に変化が生じた社会運動もある。その代表的なケースが女性運動である。范雲の「静かに小さな成果を積み上げる女性運動革命」（静默中耕耘細節的婦運革命）は、民主化の過程で同盟関係にあった民進党が2000年に政権に就くと、女性運動は積極的に政府の活動に参加し、それを通して自らの目標を実現してきたことを示している。范によれば、すでに運動と官僚の間に信頼が醸成され、提携関係は制度化されていることから、2008年の政権交代後も両者の関係は維持されていると考えられる。

民主化が進展すると、国家よりも市場あるいは資本や企業が社会運動にとってはより手強い対抗の対象として現れたことが、章を読み重ねると浮かび上がってくる。それは単に民主化によって社会運動と国家の対抗関係が減じた結果、相対的に市場との対抗関係がクローズアップされるようになったということだけではない。周知の通り、1990年以降の20年間はグローバル化の進行によって世界的に市場あるいは資本主義の力が格段に増大した時代でもあったからである。そのため、本来国家よりも資本と対抗している労働運動は、その制度上の限界もあって、1990年以降、むしろ低迷していったことを、邱毓斌「労働運動の制度的惰性がグローバル化と遭遇するとき」（當工運的制度惰性遭遇全球化）は示している。民主化してもなお環境保護運動と国家の間に対抗的な関係が続くのも、国家が資本の要求にも応えなければならないからである。一方、女性運動は台湾において、資本との間の矛盾が先鋭的ではないため、国家との協力関係が築きやすかったともいえよう。

社会運動や市民社会が市場あるいは資本主義と対抗しようとするとき、イデオロギー的にはどのような基礎に立脚しているのであろうか。台湾はマルクス主義の伝統をもともと欠いているので、何がそれを代替したのだろうか。この点で興味深いのは教育

改革に関する2つの論考——何明修の「教育改革運動の驚くべき冒険」(教改運動的驚奇冒険)と黄武雄の「教育改革における左と右」(教改中の左與右)——である。

1994年、教育改革運動は少人数教育、高校と大学の増設、教育基本法の制定、教育の近代化という4つの目標を掲げてスタートした。黄はその主唱者のひとりであった。黄の論考は、改革が一定の成果を得つつも志半ばで挫折に至る顛末を述べた論考である。これは何の論考の前身に対する回答として書かれたやや特殊な論考である。そのためか、39ページと他の論考と比べて突出して長い。また、黄は野百合世代より20歳以上年長である。これらのことから、編者たちの教育改革の意義と黄の役割を重視する姿勢がうかがわれる。

何は黄の提示した教育改革の過程を、人本主義と新自由主義の対抗関係としてとらえられることを示した(黄自身はタイトルにあるように、通常の左右の軸でみている)。民主化以前、人本主義と新自由主義はともに権威主義体制に反対する盟友であったが、民主化が進むと、両者の間の対抗的な関係が鮮明になった。何は左派的な思想の希薄な台湾では、人本主義が新自由主義に対抗する位置に置かれ、イデオロギー上の軸のひとつが形成されることになったと述べている。

これは台湾社会に関する非常に興味深くかつ有望な仮説である。人本主義対新自由主義という軸は他の社会運動にも当てはまるのだろうか、本書の他の執筆者たちの見方も知りたいところである。

### Ⅲ トピックの広がりについて

本書は必ずしも台湾社会のあらゆる課題を網羅しようとしたわけではないであろうが、選択された課題群は台湾において関心の高いトピックのリストとしてみるができる。そのとき、日本の台湾研究あるいはより広い層の台湾に対する関心との間にずれがあることがわかる。日本において台湾社会について強い関心がもたれているトピックは、エスニックグループ(以下、台湾で用いられている「族群」を使う)間の関係や、台湾か中華民国か等のアイデンティティの選択、統一・独立問題をはじめとする中国との関係である<sup>(註4)</sup>。しかし、本書では族群と

中国との関係について、それぞれ1章ずつ議論しているだけである。

それは一面では日本側の関心に偏りがあることを示している。もちろん、この偏りは当然ともいえる。海外から台湾を観察するとき、族群やアイデンティティ、中国との関係といった台湾独特の問題に注目するのは自然だからである。しかし、同時にそれらユニークな問題に関心が集中するあまり、台湾もまた日本や他の社会と同様にさまざまな課題を抱えていることが、視野から消えてしまう恐れがある。あるいは、族群や中国との関係という視点からしか問題をみることができなくなるかもしれない。本書のトピックの広がりはそのような反省を迫る。

しかしながら、他方では本書においても族群やアイデンティティ、中国との関係はもう少し重視されてもよいのではないかという疑問は残る。族群を論じた李広均の「エスニック・イメージの感動と不安」(族群想像的感動與不安)と中国について論じた呉介民の「第3の中国イメージ」(第三種中國想像)はいずれも優れた論考である。李は族群とは政治的な社会集団であるとし、族群政治とは解釈の枠組みと修辞の暗号をめぐる争いであることを明らかにしている。呉は台湾が中国との関係を断ち切ることができないならば、台湾は民主主義や人権といった価値において中国をリードすべきだと主張する。

しかし、この2章で十分だろうか。族群、アイデンティティ、中国との関係はより広範に、より深く台湾社会の諸課題に絡んでいるのではないだろうか。実際、他の章のなかにも族群、アイデンティティ、中国との関係に論及しているものがある。たとえば前述の夏曉鵬の「新移民運動」は族群問題に対する含意ももっている<sup>(註5)</sup>。李道明の「激流のように揺れ動く記録映画運動」(激流般起伏的紀錄片運動)は、漢人が先住民を撮影することの難しさを考察している。林国明の「国民健康保険の道德共同体」(全民健保的道德共同體)は、台湾を範囲とした医療保健制度が共同体を生み出すという期待を示す。これが台湾へのアイデンティティと深い関連性をもちうることは明らかだろう。顧爾徳の「メディアがパーティ・ステート体制という怪物の掌中から脱するにあたって」(當媒體走出黨國巨靈的爪掌)は中国のメディアへの浸透を警戒する。

あるいは、族群やアイデンティティや中国との関

係が広く台湾社会に浸透しているがゆえに、本書の各章のように社会の一要素として論じることが難しいのかもしれない。さらに踏みこんで指摘するならば、本書はやや要素還元的な性格をもち、複数の要素に跨る問題は議論しにくくなっているのである。族群、アイデンティティ、中国との関係を含む、台湾社会を総合的にとらえようとする論考によって、本書は補われる必要があると考えられる。

本書の執筆者たちは評者の疑問や批判にどのような回答をするだろうか。この書評は日本語で書いたが、今後は彼らと食事をしながら、あるいはメールを通して疑問や批判を伝え、対話を重ねていきたい。

(注1) 総統（大統領のこと）の選出や憲法改正の権限をもつ議員。その大部分は1940年代に中国で選出され、権威主義体制下で非改選となっていた。現在、国民大会は廃止されている。

(注2) 1990年代以降、婚姻や就労のため、台湾に移住してきた移民。大部分は中国や東南アジア出身。

(注3) 投機によって不動産価格が高騰し、住宅の購入が困難になったことに対する抗議活動。忠孝東路は東西に伸びる台北のメインストリート。

(注4) たとえば評者が沼崎一郎とともに編集した沼崎・佐藤編（2012年刊行予定）では、序章を除く9章のうち、4章が族群に、1章がナショナル・アイデンティティに、1章が中国との関係に関する議論を行っている。

(注5) 詳しくは、田上（2012年刊行予定）を参照。

### 文献リスト

- 田上智宜 2012（予定）. 「多文化主義言説における新移民問題」沼崎一郎・佐藤幸人編『交錯する台湾社会』研究双書600 アジア経済研究所。  
沼崎一郎・佐藤幸人編 2012（予定）. 『交錯する台湾社会』研究双書600 アジア経済研究所。

（アジア経済研究所新領域研究センター）